２０２３年9月１７日　礼拝説教要旨
ハイデルベルク信仰問答講解説教Ⅱ１５「苦しみの生涯」
イザヤ５３：１～５、Ｉペトロ２：２１～２５

問３７「苦しみを受け」という言葉によって、あなたは何を理解しますか。
答　キリストがその地上での御生涯のすべての時、とりわけその終わりにおいて、全人類の罪に対する神の御怒りを体と魂に負われた、ということです。それはこの方が唯一の償いのいけにえとして、御自身の苦しみによってわたしたちの体と魂とを永遠の刑罰から解放しわたしたちのために神の恵みと義と永遠の命とを獲得してくださるためでした。
なぜイエスさまがまことの人としてお生まれになられたのか。それは苦しみをお受けになられるためでした。信仰問答では「全人類の罪に対する神の御怒りを体と魂に負われた」と告白します。全人類の罪に対して神さまがお怒りになられている。その怒りをイエスさまが「体と魂」その全存在をもって受け止めてくださった。しかも「地上での御生涯のすべての時」ですから、誕生から最後の十字架の死まで、まるでわたしたちの前に立ちはだかるようにして神さまの怒りをひたすらその身にお受けになられたのです。それでわたしたちがその神さまの怒りを受けずに済んだ。結論から言えば、それがイエスさまの苦しみの意味です。

罪に対して神さまがお怒りであるという自覚があるでしょうか。わたしたちは罪を軽く考えています。どうせ人間は罪人だとか、人間は弱いと言い訳をいたします。挙げ句の果てには、このように罪を犯すように造った神さまが悪いと責任転嫁します。信仰問答は、初めから神さまは人間を良いものとして造られたと言います（問６）。神さまにかたどって、神さまと通じ合う存在として人間は造られています。それは神さまから絶大なる信頼を受けているということです。その信頼をわたしたちは裏切りました。

誰かに裏切られる経験は多かれ少なかれあると思います。信頼していた相手に掌を返すようなことをされたらわたしたちは穏やかではありません。わたしたちは神さまに対してそういうことをしているのです。牧師は毎週の礼拝で会衆を代表して懺悔の祈りをささげます。一週間を振り返れば、神さまに対して、隣人に対して、申し訳ないことばかりです。ですから神さまの怒りを受けるのは当然です。でもそのわたしたちがこのように礼拝をささげることができるのは、イエスさまがその罪に対する怒りをすべて引き受けてくださったからに他なりません。

信仰問答は、この神さまの怒りをさらに強い表現で言い表します。それが問３９です。
問３９その方が「十字架につけられ」たことには、何か別の死に方をする以上の意味があるのですか。
答　あります。それによって、わたしは、この方がわたしの上にかかっていた呪いを御自身の上に引き受けてくださったことを確信するのです。なぜなら、十字架の死は神に呪われたものだからです。
ここには「呪い」という強い言葉があります。イエスさまの苦しみは、十字架の死において頂点に達しますが、同時に十字架は神さまの怒りの頂点でもあります。それが「呪い」という言葉に表されています。罪を犯したアダムに神さまは「お前のゆえに土は呪われるものとなった・・・塵にすぎないお前は塵に返る」（創世記３：１７～１９）と言われました。パウロは「罪によって死が入り込んだ」（ローマ５：１２）と言います。罪ゆえに人間は神さまから呪われ、死すべき存在となりました。

ところが、そのわたしたちが受けるべき神さまの呪いを、わたしたちに代わってイエスさまが引き受けてくださった。だからわたしたちは神さまに呪われなくて済んだのです。さらに信仰問答はポンテオ・ピラトのことについても次のように言い表します。

問３８なぜその方は、裁判官「ポンテオ・ピラトのもとに」苦しみを受けられたのですか。

答　それは、罪のないこの方が、この世の裁判官による刑罰をお受けになることによって、わたしたちに下されるはずの神の厳しい審判から、わたしたちをまぬがれさせるためでした。

神さまを裏切ったのですから、当然わたしたちは神さまの厳しい審判、裁きを受けなければなりません。ところがイエスさまがピラトに裁かれたことで、それがわたしたちが受けるべき神さまの審判、裁きとなった。それによってわたしたちは神さまの裁きを免れたというのです。本当にこのようなことがあっていいのでしょうか。信仰問答は言葉をかえて、わたしたちの代わりにイエスさまが苦しまれ、裁かれ、呪われて、それでわたしたちが裁かれず、呪われずに済んでいるといたします。なぜ神さまはそこまでなさるのでしょうか。

すすんで苦しみを引き受け、わたしたちに代わって裁かれる、呪われる。それが神さまの愛し方です。あるいは愛するとはどういうことなのか、身をもって示されたと言ってもよいでしょう。かえりみて、わたしたちの愛はどうでしょう。わたしたちは平気で神さまを裏切り、人を裏切ります。それは本気で愛していないということでしょう。イエスさまは弟子たちに裏切られました。誰一人として、イエスさまのために苦しみを引き受けようとついてきたものはいませんでした。でもヨハネ福音書には、よみがえりのイエスさまがペトロに「あなたはわたしを愛するか」と三度お尋ねになられたという話があります。そして「わたしの羊を飼いなさい」と言われました。それは羊のために命を捨てる、すすんで苦しみを引き受ける、そのようにして自らが愛する者となれと教えられたのです。そして、実際、ペトロはそのように生きました。彼は最後殉教しました。イエスさまを否むのではない、イエスさまを最後まで愛し抜いたのです。でもそれは人間の強い意思でそうしたのではありません。ペトロがそのようにイエスさまに愛されたからこそ本気でイエスさまを愛する者へと召し出されたのです。

ペトロの手紙に「あなたがたが召されたのはこのためです。というのは、キリストもあなたがたのために苦しみを受け、その足跡に続くようにと、模範を残されたからです」（Ｉペトロ２：２１）とあります。イエスさまは愛の模範を残されました。すすんで苦しみを担われて、わたしたちを本気で愛してくださいました。だからわたしたちもその足跡に続くのです。愛することは簡単なことではありません。時に痛みを伴います。イエスさまを愛すること、教会に仕えることもそうでしょう。それでもすすんで苦しみを引き受けることでわたしたちはイエスさまを愛するのです。教会を愛するのです。わたしたちの愛が問われています。

天の父よ。御子は、わたしたちに代わって苦しみを受け、代わって裁かれ、わたしたちが受けるべく呪いを引き受けてくださいました。それほどにわたしたちを愛してくださいます。どうぞその愛に気づかせてください。そしてその愛の足跡に続くことができますように強めてください。主の御名によって祈ります。アーメン。